

論文

貨幣生成の理論について

小林 威雄

一

貨幣論におけるさいしょの重要な問題は、貨幣生成の必然性の問題である。

F・エンゲルスは、『資本論』第二巻の序言のなかでつぎのようにのべている。

「かくして、マルクスは、労働を研究してその価値形成的な質に達し、そしてはじめて、いかなる労働が、またなぜに、またいかにして価値を形成するかということ、および、価値とは総じてこの種の凝固した労働以外のなものでもないということを、つきとめた。……ついでマルクスは商品と貨幣との関係を研究して、いかにしてまたなぜに、商品に内在する価値性質により、商品したがって商品交換が商品と貨幣との対立を生みださざるをえないかを論証した。この論証を基礎とするかれの貨幣理論は、さいしょの十全な、そしていまや暗黙のうちに一般に承認されている貨幣理論である」(『資本論』第二巻、S.16、長谷部訳、青木版二七ページ)。

「いかなる労働が、またなぜに、またいかにして価値を形成するか」とのべているのは、価値論の固有の課題の要約であり、さいこの「この論証を基礎とするかれの貨幣理論……」とは、いうまでもなく、『資本論』第一巻第一篇第三

章「貨幣または商品流通」において論述されている貨幣理論をさしている。そして、これら二つの叙述のあいだでべられている「いかにしてまたなぜに、商品に内在する価値性質により、商品したがって商品交換が商品と貨幣との対立を生みださざるをえないか」というのは、価値論から貨幣論への移行における課題の要約であるが、これは、貨幣生成の必然性の問題における課題についてのべているわけである。貨幣は、「商品に内在する価値性質により」必然的に商品そのものから生成してくるのだ、ということを確認しておくことが、まず肝要である。マルクスは、「貨幣の分析におけるおもな困難は、貨幣が商品そのものから発生するということが理解されれば、たちまち克服される」(Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 13, 所収、『経済学批判』S. 49, 杉本俊朗訳、国民文庫、七六ページ)とのべている。貨幣は、商品そのものから必然的に生成してくるのであるが、この貨幣生成の必然性をどのような側面から考察し、あきらかにしていったならばよいのであろうか。

『資本論』第一巻第一篇第二章「交換過程」の終りに近いところにつきぎのような文章がある。

「貨幣が商品であるのを知るのは、すでに一七世紀の後期において貨幣分析の端初の域をはるかに越えていたとしても、しかしやはり端初にすぎなかった。困難は、貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく、いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか、を把握する点にある」(『資本論』第一巻、S. 98, 邦訳、二〇二ページ)。

「貨幣が商品であるということは、貨幣の完成した姿態から出発して、これを後から分析する者にとっての一つの発見であるにすぎない」(『資本論』第一巻、S. 96, 邦訳、一九九ページ)から、貨幣が商品であることを知ることが、貨幣分析の端初であるにすぎない。困難は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか、を把握する点

にある」というわけである。「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの困難な課題がここで指摘されているが、この三つの困難な課題がいきらかにされて、はじめて貨幣生成の必然性が説明されることになる。貨幣生成の必然性は、「いかにして商品が貨幣であるか」という側面から、また「なぜに商品が貨幣であるか」という側面から、そして「なにによって商品が貨幣であるか」という側面から、以上の三つの側面から考察しなければならぬ。

では、『資本論』のいずれの箇所において、貨幣生成の必然性という問題のこれらの三つの側面からの考察がおこなわれており、この困難な課題が克服され、説明されているのであろうか。マルクスが「いかにして、なぜに、なにによって商品が貨幣であるか」という三つの困難な課題を指摘していることは、かれ自身がこれらの三つの困難な課題を克服したということをいいあらわしているということになるが、しかし、どこの箇所において、どの課題を克服し、説明したというような言葉はなく、またこのようなことについてのなんらの暗示をもあたえていない。そこで、手もとにある二、三の論文、書物で諸論者が、この「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という課題をどのようにもちいているか、どのように理解しているか、そして、これらの三つの課題が『資本論』のいずれの箇所において説明されているか、さらには貨幣生成の必然性の問題をどのようにとりあつかっているか、等々のことについてみてみよう。

(1) 原文はつぎのとおりである。

“Wenn es schon in den letzten Decennien des 17. Jahrhunderts weit überschrittner Anfang der Geldanalyse, zu wissen, daß Geld Ware ist, so aber auch nur der Anfang. Die Schwierigkeit liegt nicht darin zu begreifen, daß

貨幣生成の理論について

四

Geld Ware, sonderm wie, warum, wodurch Ware Geld ist.,

なお、この文章は、初版においても第二章「商品の交換過程」のところにあり、再版とおなじように第二章のさいいのパラグラフの二つ前にある。

英訳はつぎのとおりである。

“In the last decades of the 17th century it had already been shown that money is a commodity, but this step marks only the infancy of the analysis. The difficulty lies, not in comprehending that money is a commodity, but in discovering how, why, and by what means a commodity becomes money.” (Foreign Languages Publishing House, Moscow 1954, p.92)

この英訳からは後段の文章は、「困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣となるかを見出す点にある」というように邦訳されるであろう。ドイツ語の原文によれば「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」と邦訳されるのであるが、英訳から邦訳すると「いかにして、なぜに、なにによって商品が貨幣となるか」というようになり、相違がある。邦訳書においては、ほとんどが「いかにして、なぜに、なにによって、商品が（あるいは商品は）貨幣であるか」となっているが、高畠素之訳では「貨幣が商品であることを理解する点ではなく、寧ろ商品なるものは如何にして、何故に、また何に依って、貨幣となるかを理解する点に、難関が存しているのである」（改造社、昭和二年一〇月、六二ページ、傍点―引用者）となっている。後述するが、飯田繁氏もこのところを「困難は貨幣が商品だということを知ることにあるのではなく、商品がどのようにして、なぜ、なにによって貨幣となったか」とを把握することにある」（飯田繁稿「貨幣」、久留間鮫造・その他編『資本論辞典』、青木書店、一九六一年、五六ページ、傍点―引用者）というようにしてもちいている。

二

○宇野弘蔵氏の見解

「マルクスは、『貨幣の必然性』に対して、所謂第一、第二、第三の価値形態の発展を通じて、相対的価値形態が如何なる発展を遂げ、これに対応して等価形態が如何なる発展をなしたか、更に又等価形態が遂に一般的等価形態として一商品に固定し、貨幣形態が完成する迄に、此等の両形態は如何なる関係を展開して来たかということを詳細に分析している。そしてそれは単に分析したというだけではない。商品の二重性質が展開するそれ自身の発展として、これを説明している。かくして始めて『如何にして、何故に、何によって商品は貨幣であるか』（マルクス）という最も困難な点——即ち『貨幣の必然性』は明かにせられるのである」（宇野弘藏『資本論の研究』、所収、「貨幣の必然性」、岩波書店、六八ページ）。

宇野氏は、マルクスは貨幣生成の必然性については『資本論』第一卷第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」のところで詳細に分析していると考えられている。そして、「それは単に詳細に分析したというだけでなく、『商品の二重性質が展開するそれ自身の発展として』貨幣生成の必然性を説明しているとされ、ついで「かくして始めて」とされて貨幣生成の必然性の問題における三つの困難な点を指摘しているマルクスの叙述を引用され、「貨幣の必然性は明かにせられるのである」と結ばれている。したがって、宇野氏は、貨幣生成の必然性の問題における「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの側面からの考察は、第三節「価値形態または交換価値」のところですべてなされており、そしてこれらの三つの困難な課題が克服され、説明されていると考えられていることになる。

○古沢友吉氏の見解

「貨幣の必然性を説明するうえでの『困難は、貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく、いかにして、貨幣生成の理論について

なぜに、なんによって商品が貨幣であるかを把握する点にある。』そして、この問題の解決は、商品の二重性が展開するそれ自体の発展として、『貨幣形態の発生史を証明すること——つまり、諸商品の価値、関係にふくまれている価値表現の発展を、その最も簡単な最もみすばらしい姿態から、燦爛たる貨幣形態にまでたどること——をなしとげることである。それによって同時に、貨幣の謎も消滅する。』（古沢友吉「ヒルファディング『金融資本論』の出发点について——『金融資本論』研究（一）——」、『横浜大学論叢』第七巻、社会科学系列、第三号所収、八四ページ）。

古沢氏は、貨幣生成の必然性を説明するうえでの困難として、マルクスの三つの困難を指摘している文章を引用し、そしてこの三つの困難な課題の解決は、「商品の二重性が展開するそれ自体の発展として」とのべ、引用文でしめくくっている。この引用文は、『資本論』第一巻第一章第三節「価値形態または交換価値」のところの第三パラグラフにかかれてある文章である。したがって、古沢氏も宇野氏と同様に、貨幣生成の必然性の問題における三つの側面よりの考察は、第三節「価値形態または交換価値」においてなされており、この第三節のところで三つの困難な課題が解決されていると考えられていることになる。

○デ・イ・ローゼンベルグの見解

「第一章でも、第二章でも、矛盾は、商品世界から一つの商品が分かれて貨幣の役割をになうということ、解決される。こうして貨幣の本性が明らかにされ、その起源の問題が解決される。貨幣の本質は、それが価値の一般的形態であり、一般的等価物だということにある。これは第一章の研究でしめされる。だが第二章では、交換そのもののなかでどのようにして「いかにして」貨幣が発生するか、どのようにして「いかにして」、『労働生産物の商品への転化がおこなわれるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化がおこなわれる』かが、証明される」（デ・イ・ローゼンベ

ルグ『資本論注解』、第一卷、副島種典・宇高基輔訳、青木書店、一〇三—四ページ、ハ　」内は梅村二郎訳、第七書房。

「貨幣の問題は、もっとも一般的な形では、つぎの二つの基本的な問題に帰着する。すなわち、(一)貨幣の本質の問題——その社会的本性はどういうものか、それはなにを表現するか、という問題、(二)貨幣の発生の問題——それはどのようにして「いかにして」発生したか、という問題、である。そして第一章では第一の問いに、第二章では第二の問いに解答があたえられるのである。価値形態の分析は貨幣の本質を暴露するが、しかしそれがどのようにして、どういう原因で「いかにして、なにによって」発生したかはしめさない。ところが交換の分析は、交換が遭遇し、また貨幣の出現にみちびくもろの矛盾と困難を暴露するのである。したがって、マルクスは第一章と第二章で、貨幣の問題に異なる側面から接近しているのである」(前掲書、一七三—四ページ、ハ　」内は梅村訳)。

『資本論注解』における以上の二つの文章によってあきらかなように、ローゼンベルグは、『資本論』第一卷第一篇第一章「商品」においては、貨幣の基本的な問題の一つである貨幣の「社会的本性はどういうものか、それはなにを表現するか」という貨幣の本質の問題にたいする解答があたえられているのであり、そして『資本論』第一卷第一篇第二章「交換過程」においては、貨幣が「いかにして」、「なにによって」発生するのか、という貨幣の発生の問題にたいする解答があたえられているのであって、マルクスは第一章および第二章において、それぞれ相異なる側面から貨幣の問題に接近しているのだ、とのべている。

ところで、ローゼンベルグは、『資本論注解』の第一章「商品」の第三節「価値形態または交換価値」のところで、
「だから、二つの課題がさだめられているわけである。第一に価値の研究を完了することである。……第二の課題は、貨幣形態の発生をあとづけることであり、これによって貨幣の謎もなくなる」(前掲書、一二九ページ)という

ようにものべている。価値形態論の課題の第二は「貨幣形態の発生をあとづけること」であるならば、『資本論』第一巻第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」のところでも貨幣の発生の問題がとりあつかわれていると考えてもよいはずなのであるが、しかし、ローゼンベルグは、まさに引用した第二の文章のなかにあるように「価値形態の分析は貨幣の本質を暴露するが、しかしそれがどのようにして、どういう原因で「いかにして、なにによって」発生したかはしめさない」といつているのであるから、やはり、ローゼンベルグにあつては、価値形態の分析は貨幣の本質をあきらかにするのであつて、貨幣の発生「いかにして」をもあきらかにしないことになる。

したがつて、結局のところ、ローゼンベルグは、貨幣の発生の問題は『資本論』第一巻第一篇第二章「交換過程」のところ考察されており、貨幣が「どのようにして、どういう原因で」、つまり、「いかにして」、「なにによって」発生するのかが解明されている、とするわけである。ローゼンベルグによれば、貨幣生成の必然性の問題における三つの側面をなす課題のうちの、「いかにして商品が貨幣であるか」および「なにによって商品が貨幣であるか」という二つの側面からの考察は、いずれも第二章「交換過程」のところでおこなわれており、そして解明されている、ということになる。もう一つの側面からの考察、すなわち「なぜに商品が貨幣であるか」という側面からの考察についてはふれておらず、考慮していない、ということになる。⁽²⁾

(2) 笠信太郎氏はつぎのようにかいている。

「第一に吾々は『簡單なる流通』への門をくぐらねばならぬ。この門に入るには、まづ商品から貨幣への転化が必要である。一般に貨幣は商品でなければならぬが、この過程で肝要な問題は、『商品は、如何にして、何故に、何によって、貨幣であるか』の把握である。マルクスはこの過程を『批判』第一章において、『資本論』第二章「交換過程」において準備する」(笠信太郎『金・貨幣・紙幣』、昭和八年三月、一六―七ページ)。

したがって、笠氏も「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題は、いずれも第二章「交換過程」のところで説明されているとしている。

○飯田繁氏の見解

「では、貨幣はどういう商品なのか。困難は、貨幣が商品だということを知ることにあるのではなく、商品がどのようなにして、なぜ、なにによって貨幣となったかということ把握することにある（K―九八、青木―二〇二、岩波―一七六）。貨幣は、たんなる商品ではなく、価値形態として存在し機能するために商品世界のなかから社会的に選出され、排除されたところの商品である。そこで貨幣の本質は、たんに商品ということにあるのではなく、価値形態としての商品ということにある。こうして貨幣本質の解明は価値形態の究明によってあたえられよう」（飯田繁稿「貨幣」、久留間鮫造・その他編『資本論辞典』、五六ページ）。

この文章のなかの（ ）内の「K―九八」は『資本論』第一卷、九八ページということでドイツ語原典の巻およびページをしめしており、「青木―二〇二、岩波―一七六」は、それぞれ邦訳の青木版、岩波版の第一分冊のページをしめしている。この『資本論』第一卷の九八ページには、わたくしが問題にしている文章があり、この箇所でマルクスのべている文章にもついで飯田氏の叙述がなされているわけである。まず、飯田氏は「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」というマルクスの叙述を「商品がどのようにして、なぜ、なにによって貨幣となったか」というようにかきなおされている。この点については注（一）をみられたい。

飯田氏は、この文章によってあきらかなように、「困難は、貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく、いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか、を把握する点にある」というマルクスの文章を貨幣の本質の

問題と関連させて記述している。したがって、飯田氏にあっては「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」を把握する三つの困難は、貨幣の本質を理解するのにもなう三つの困難として考えられている。つまり、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題は、貨幣の本質論における課題であって、貨幣生成の必然性の問題における課題としてはとらえられていない。「いかにして商品が貨幣であるか」という課題の究明によって貨幣の本質があらかにされるが、しかし、この課題は、貨幣の本質の問題にのみかぎられた課題ではない。「いかにして商品が貨幣であるか」という課題は、貨幣生成の必然性の問題における一つの困難な課題でもある。このように「いかにして商品が貨幣であるか」は、たしかに貨幣の本質を究明する問題における課題として貨幣の本質の問題と関連するが、しかし「なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」は、貨幣の本質の問題そのものの課題であるとはいえない。ところが、飯田氏は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題すべてが貨幣の本質の問題そのものの課題であると、ここではのべられているのである。そして、飯田氏は、「貨幣本質の解明は価値形態の究明によってあたえられよう」とのべられているのであるから、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの困難な課題は、すべて「価値形態の究明」によって解明され、困難が克服されると考えられていることになる。価値形態の究明がなされている『資本論』の箇所は、第一巻第一篇第一章第三節である。したがって、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」は、飯田氏にあっては、いずれも貨幣の本質の問題における三つの課題ではあるが、これらの困難な課題は『資本論』第一巻第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」のところですべて解明されているという考えであるということになり、この点では、さきの宇野氏および古沢氏の見解と同じである。そして、飯田氏は、この第三節で展開されている価値

形態論においては、貨幣の本質があきらかにされているとするわけであるから、この点では、ローゼンベルグの見解と同じである、ということになる。

では、飯田氏は、貨幣生成の必然性についてどのような方法にもとづいて説明されているであろうか。

飯田氏は、昭和二三年に発表された「貨幣の必然性」という論文において、まずつぎのようにのべられている。

「マルクスは、ローゼンベルグが註解しているように、貨幣の本質を資本論第一卷第一章(三)『価値形態、即ち交換価値』において、貨幣の発生を第二章『交換過程』において、それぞれ論究している。このことから、まず、貨幣発生(およびその必然性)の問題は貨幣本質の問題が解明されたのちに、はじめて解決されるものであるという基本的方法が知られる」(飯田繁「貨幣の必然性」、『経済学雑誌』、第一九卷第四・五号所収、一ページ、昭和三年一月)。

まず、飯田氏は、貨幣との関係における『資本論』第一卷第一章第三節「価値形態または交換価値」および第二章「交換過程」の「位置づけ」をローゼンベルグの見解に依拠している。したがって、飯田氏は、貨幣発生(およびその必然性)の問題は第二章「交換過程」において論究されているとするわけであるが、このばあい貨幣の本質の問題を解明したのちにはじめて貨幣発生(およびその必然性)の問題が解決されるのだ、とされている。貨幣の本質は『資本論』第一卷第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」のところであきらかにされているのであるから、この価値形態論をぬきにしては貨幣発生(およびその必然性)の問題はとりあつかうことはできないということとをいわれているのであるが、だからといって第三節のところでの論述が貨幣生成の必然性の問題における一つの側面をなす論述であるということにはならない。飯田氏は、この第三節においてあきらかにされるのは貨幣の本質である、とされているにすぎないからである。飯田氏は、『資本論』第一卷第一篇第一章第三節「価値形態または交換価

値」の論述を貨幣の本質の把握という点でだけとらえ、貨幣生成の必然性の問題における一つの側面をなす課題があまりにされているものとしてとらえていない。

この文章においてのべられている飯田氏の「貨幣発生論の方法」としての「基本的方法」は、「まず、貨幣発生（およびその必然性）の問題は貨幣本質の問題が解明されたのちに、はじめて解決されるものである」という方法であり、貨幣の本質が解明される価値形態論は、貨幣生成の必然性をとりあつかうための前提としてのみとらえているのであるが、飯田氏は、他のところでは、価値形態論をたんに貨幣の本質を理解するためのものとしてのみでなく、また貨幣生成の必然性の理解のためのものとしてもとらえており、また貨幣の本質じたいのなかに貨幣生成の必然性の根因があるというようにものべられている。

「貨幣の必然性は、第一義的には『価値および価値形態の必然性』の中に求めらるべきであり、それが確固たる前提となつて、はじめて『交換の必然性』は貨幣の現実的発生 of 必然性を説明する要因となりうる」（前掲論文、三ページ）。

「貨幣の本質がそのような『価値』の一般的表現形態、一層正確にいえば、一般的等価物である以上、貨幣本質じたいの中に貨幣出現の必然性の根因が包蔵されている」（前掲論文、一五ページ）。

「なぜなら、貨幣発生 of 必然性の問題の中から、その内奥にひそむところの、すでに、われわれによって理解された必然性の問題、すなわち商品生産社会における価値、価値形態の歴史的社会的必然性の問題、したがって貨幣本質の中に存在する歴史的社会的必然性の問題が、解決ずみの問題として除外されると、あとにはただ交換過程と貨幣発生との関係をめぐる問題だけがのこされるからである」（前掲論文、一五—六ページ）。

以上のように、飯田氏は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題を貨幣生

成の必然性の問題における課題としてとらえないで、貨幣の本質の問題における課題としてとらえ、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題は、いずれも貨幣の本質が明らかにされている『資本論』第一巻第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」のところで説明されているとされており、もう一つの論文「貨幣の必然性」においては、貨幣生成の必然性の問題は『資本論』第一巻第一篇第二章「交換過程」のところで説明されているとしながら、なお貨幣の本質そのもののなかに貨幣生成の必然性の根因があるということをもべている。わたくしが問題にしている「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題は、貨幣の本質の問題における課題として把握しているが、結局、飯田氏は、貨幣生成の必然性の問題は、価値形態論が展開されている『資本論』第一巻第一篇第一章第三節および交換過程論が論述されている第二章において説明されていると考えられていることになる。

○三宅義夫氏の見解

「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか、あらねばならぬか、を把握することは、第一に、商品の交換価値を、つまり商品の価値表現を追究して一般的価値形態にいたり、そして貨幣形態の発生を見出すことによって、第二に、なぜ労働が価値においてみずからを表示するかという商品物神を、したがってまた貨幣物神を明らかにすることによって、そして最後に、交換過程において、『他のすべての諸商品の社会的行動が、よってもってそれらが自分たちの諸価値を全面的に表示するところの、ある一定の商品を排除する』ことを、反対側からいえば、『一般的等価たるものが、社会的過程によって、その排除された商品の独自の、社会的な機能となる』（一九二頁『資本論』第一巻、592）傍点原文のもの」ことを明らかにすることによって、それぞれなしとげられているわけである。か

くて第三章『資本論』第一卷第三章〕は、第一章での価値形態論、物神性の解明、第二章の交換過程論をうけて、それらを直接の基礎としているものである。

第三章の基礎となっている右の論証は、一言をもっていえば貨幣の必然性を明らかにしているものにはかならない。そしてこの必然性を、商品に含まれている労働の二重性格から一貫して把握することが、いいかえれば、労働生産物の商品としての表示と貨幣の必然性を一つの法則として把握することが、肝要なのである」(三宅義夫『貨幣信用論研究』、未来社、昭和三十一年一月、第一章「貨幣小論」、一三―四ページ、ハ)内は引用者。なお、この「貨幣小論」は、昭和二十六年十一月に刊行された民主主義科学者協会編『講座・資本論の解明』、理論社、第二分冊の「原典解明」の「貨幣」として発表されていたものである。

三宅氏は、この文章のまえに『資本論』第一卷の九八ページにある、わたくしが問題にしているマルクスの叙述を引用されている。そして、この文章において「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」ということは、それぞれのどのような内容をもつ課題であるかということ、それぞれの課題はなにを研究することによってあきらかにされるかということ、そして、この三つの課題の解答は『資本論』のいずれの箇所においてあきらかにされているかということ、についてのべられている。すなわち、「いかにして商品が貨幣であるか」を把握することは、「商品の交換価値を、つまり商品の価値表現を追究して一般的価値形態にいたり、そして貨幣形態の発生を見出すことによつて」なしとげられるのであり、そして、この課題は、『資本論』第一卷第一篇の「第一章での価値形態論」つまり第二章第三節「価値形態または交換価値」のところであきらかにされており、「なぜに商品が貨幣であるか」を把握することは、「なぜ労働が価値においてみずからを表示するかという商品物神を、したがってまた貨幣物神を明らかに

にすることによって」なしとげられるのであり、そして、この課題は、「第一章での物神論の解明」つまり第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」のところであきらかにされており、「なにによって商品が貨幣であるか」を把握することは、「交換過程において、『他のすべての諸商品の社会的行動が、よってもってそれらが自分たちの諸価値を全面的に表示するところの、ある一定の商品を排除する』ことを明らかにすることによって」なしとげられるのであり、そして、この課題は、「第一章の交換過程論」つまり第二章「交換過程」のところであきらかにされている、とのべられている。そして、これらの三つの課題にたいする論証は、「貨幣の必然性を明らかにしているものにはかならない」とされているのである。したがって、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という課題は、貨幣生成の必然性の問題における三つの課題であり、貨幣生成の必然性は、これら三つの側面から考察し、これら三つの課題をあきらかにすることによってはじめて正しく理解することができる、ということを描き出している。

三宅氏のこの文章は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題の内容を的確に要約しており、かつ『資本論』におけるそれぞれの課題にたいする「位置づけ」を明瞭に示しているものとして貴重な文章である。

ところが、三宅氏のその後にかかれた論稿を読んでもみると、以上のような見解とはすこしことなる感じのする文章につきあたるのである。

久留間鯨造・その他編『資本論辞典』のなかの「労働貨幣」の項は三宅氏がかかっているのであるが、そこでは三宅氏はつぎのようにのべられている。

「なぜ商品価値の大きさは直接に労働時間で表示されえないか、なぜ金という外在的尺度が必要であるか」と、商品生産の基礎上では、労働は個々の私的労働として営まれているから、直接に社会的労働として表示されえないからである。これはまたいいかえるならば、商品のなかからなぜ貨幣が出てこざるをえないかという貨幣の必然性の問題であつて、マルクスが『資本論』第一巻第一篇「商品と貨幣」の第一章、第二章の価値形態論、交換過程論であきらかにしたものも、この貨幣の必然性ということであつた」（久留間鯨造・その他編『資本論辞典』、四四九ページ、傍点引用者）。

この文章からは、貨幣生成の必然性の問題は、『資本論』第一巻第一篇の「第一章、第二章の価値形態論、交換過程論」のところであきらかにされている、というようになる。交換過程論は、第二章「交換過程」のところで論ぜられていのであるから、別になにもつけ加えるということはない。「第一章の価値形態論」とかかれているところに問題がある。「第一章の価値形態論」とかかれているのは、第一章の全体の論述を総称されて「価値形態論」とされているのであろうか。それとも第一章の一つの節における論述をさして「価値形態論」とされているのであろうか。もしかりに、第一章の全体の論述を総称されて「第一章の価値形態論」とされているとするならば、「いかにして、なぜに、商品が貨幣であるか」は、いずれも第一章において——第一章第三節および第四節において——あきらかにされているわけであるから、『貨幣信用論研究』の「貨幣小論」でのべられているまえに引用した文章における見解と——不明確ではあるが——同じであるということになる。しかし、「第一章の価値形態論」とかかれているその意味を第一章の全体の論述の総称としてとらえるということはどうしても無理である。『資本論』第一巻第一篇第一章の表題は「商品」であり、そこでは商品の二要因——使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）について、商品で表示

される労働の二重性格について、価値形態について、商品の物神的性格とその秘密について論述されているのであって、これらの論述を一括して「価値形態論」と総称することはとうていできないことである。第一章を「価値形態論」というように総称することができないならば、「第一章の価値形態論」とかかれているのは第一章の一つの節の論述をさして「価値形態論」とされているということになる。

通常、価値形態論といえば、『資本論』第一巻第一篇第一章第三節の「価値形態または交換価値」のところで論述されているものをさしている。三宅氏自身も『資本論辞典』の「価値形態」の項目のところで、まず「『価値形態論の地位と課題』という見出しのもとで「マルクスは『資本論』第一巻第一篇第一章第三節の価値形態論……」（前掲『資本論辞典』、二六ページ）とされている。『資本論辞典』の「労働貨幣」のところでもかかれている「第一章、第二章の価値形態論、交換過程論」というのは、第一章第三節「価値形態または交換価値」および第二章「交換過程」であるとする——そうでなければならぬはずである——、『貨幣信用論研究』の「貨幣小論」においてのべられている貨幣生成の必然性の問題は第一章第三節、第四節、第二章のところであきらかにされているという見解が、第一章第三節、第二章のところであきらかにされているという見解にかわっているということになる。つまり、「労働貨幣」のところでは、貨幣生成の必然性の問題における一つの課題である「なぜに商品が貨幣であるか」があきらかにされているとされる第四節「商品の物神的性格とその秘密」についての指摘がなされておらず、この第四節が除外されているのである。

ところで、この「労働貨幣」のところから引用した文章のさいしょの「なぜ商品価値の大きさは直接に労働時間で表示されえないか、なぜ金という外在的尺度が必要であるか」ということは、「なぜに商品が貨幣であるか」という課

題の別の表現である。したがって、ここでは、「なぜに商品が貨幣であるか」は、第一章第三節、第二章のところであきらかにされる、とされていることにもなる。

以上のように、三宅氏は『貨幣信用論研究』と『資本論辞典』の「労働貨幣」のところでは、貨幣生成の必然性の問題は『資本論』のいずれの箇所において説明されているかということについて、また貨幣生成の必然性の問題における「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題にたいする『資本論』における「位置づけ」について相異なる見解をのべられているということになる。

○久留間鮫造氏の見解

「今やわれわれは次のようにいうことができる。価値形態論では貨幣の『如何にして』が論じられ、物神性論ではその『何故』が論じられるのに対して、交換過程論ではその『何によつて』が論じられるのであると。マルクス自身も、『資本論』の第二章『交換過程』の終りに近いところ（それは第三章の貨幣論の直前のところであり、したがってまた、第三章以前の貨幣に関する考察の最後のところにあたる）にこう書いている。『困難は、貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく、如何にして、何故に、何によつて *wie, warum, wodurch* 商品が貨幣であるかを把握する点にある。』（九八頁。）ここでのこれらの三つの困難の指摘が、同時に、彼自身が見事にそれらを克服したことを暗示していることは明らかであるが、どこでそれをなしとげたかについては何らの暗示をあたえていない。わたしは、この『如何にして』と『何故に』と『何によつて』とが、それぞれ、第一章の第三節と第四節と第二章とで答えられているものと解するわけであるが、これによるとマルクスは、ここで三つの困難を指摘したさいに、彼がそれらを『資本論』で克服した順序にしたがってあげたのだ、ということになるであろう」（久留間鮫造『価値形態論と

交換過程論』、岩波書店、昭和三二年七月、四〇—一ページ、傍点—原文。

久留間氏は、この文章によってあきらかなように、「いかにして商品が貨幣であるか」は、『資本論』第一卷第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」において、「なぜに商品が貨幣であるか」は、第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」において、「なにによって商品が貨幣であるか」は、第二章「交換過程」においてそれぞれ説明されている、とされている。そして、このような結論にいたるまでには『資本論』第一卷第一篇第一章の各節について、また第二章についてそれぞれの内容の要約、相互の関係、「位置づけ」を検討され、あきらかにされているのであるから、久留間氏は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題のそれぞれの意味、内容についても詳細に論じられ、あきらかにされているわけである。

この「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題が、それぞれ『資本論』第一卷第一篇第一章の第三節、第四節、第二章において説明されているという見解は、まえにのべたように三宅氏の『貨幣信用論研究』においてのべられている見解と同じである。

ところで、ここで引用した文章は、久留間氏の著書『価値形態論と交換過程論』の前篇「価値形態論と交換過程論」の終りに近いところにある文章であるが、この「価値形態論と交換過程論」という論文は、昭和三十一年一〇月に『経済志林』第二四巻第四号において発表されたものである。これにたいして、三宅氏が『貨幣信用論研究』においてのべられている見解がでている同書の第一章「貨幣小論」は、まえに三宅氏のこの見解がのべられている文章を引用したさいに注記しておいたように、民主主義科学者協会編『講座・資本論の解明』の第二分冊に「貨幣」という表題で発表されたものであり、この第二分冊が刊行されたのは昭和二十六年一月である。したがって、「いかにして、なぜ

に、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題がそれぞれ『資本論』第一巻第一篇第一章の第三節、第四節、第二章において説明されているとする見解は、それが発表された時期においては三宅氏の方が数年早いということになる。

○麓健一氏の見解

麓健一氏は、最近、有斐閣から『貨幣論』という書物を出版された。この『貨幣論』の第一章は「貨幣発生の必然性」となっている。この第一章の構成は、「まえがき」、「Ⅰ商品の二要因——使用価値と価値」、「Ⅱ商品に含まれている労働の対立的二重性」、「Ⅲ価値形態の発展——貨幣形態の発生・貨幣の謎の解明」、「Ⅳ貨幣はなぜ必然的に発生するのか——商品の神秘的・物神的性格」、「Ⅴ貨幣発生の実在的必然性——交換過程」である。そしてⅢ、Ⅳ、Ⅴのそれぞれの節においては、そのさいしょの項のなかでそこで考察され、あきらかにされる問題についてのべられている。

Ⅲ節、「本節は商品の価値形態の発展をば、そのもっとも簡単な・未成熟な形態から、こんにちの完成せる統一された貨幣形態にいたるまで追跡し、それによって貨幣形態の・したがって貨幣の・必然的発生を、抽象的・思维的に証明し、それによって同時に貨幣形態の・したがって貨幣の・謎を解明しようとするものである」（麓健一『貨幣論』、有斐閣双書、昭和四一年三月、一八ページ）。

Ⅳ節、「すでに述べたように、商品の価値はその商品を再生産するために社会的に必要な労働時間によって決定される。このように、商品の価値（価値の大きさ）が社会的必要労働時間によって規定されているにもかかわらず、この歴史的に規定された特殊な商品生産社会においては、それは直接的に・絶対的に・労働時間によってはあらわされ

ないで、他の商品の一定量によって、そして究極的には必然的に特定の貨幣商品たる金の一定量によって、すなわち貨幣形態において、したがって価格として、間接的に・回り道をして・相対的に・のみ表現されねばならないのである。このように商品価値が必然的に価格形態をとらねばならないのはなぜであるか、ひいてはさらに、貨幣はなぜ必然的に発生するのか?——これがここでの問題である」(同書、二九—三〇ページ)。

V節、「われわれはこれまでⅢ節の『価値形態の発展』のところで、商品の価値はどのように表現されるか、ということつまり価値の形態を問題にし、それが他の商品の一定量によって、ひいては特定の貨幣商品たる金の一定量によって、表現されること、つまり商品の価値は必然的に貨幣形態＝価格形態をとらざるをえないことを明らかにした。

このことはとりもなおさず、商品生産社会における貨幣形態の必然性、ひいては貨幣発生 of 必然性を説いたことになる。ついでⅣ節の『商品の物神的性格』のところで、貨幣はなぜ必然的に発生するのか、ということの問題にし、これにたいして、生産物相互の交換をとおしてのみはじめて、労働の社会的性格が実証される商品生産社会においては、人と人との社会的関係(本質)が物と物との関係(現象形態)として表現されざるをえないということ、つまり商品経済の物神性のなかに貨幣発生 of 必然性の根拠があることを明らかにした。いまや本節では「諸商品相互の現実的な関係」(Kr.36.)たる交換過程を分析し、そこから貨幣発生 of 必然性を明らかにしたい。なぜなら、『交換過程は同時に貨幣の形成過程でもある』(Kr.49.)からである」(同書、三五—六ページ)。

これらの文章によってあきらかなように、麓氏は、Ⅲ節において価値形態について、Ⅳ節において商品の物神性について、V節において交換過程について考察され、これら三つの側面から貨幣発生 of 必然性をあきらかにしようとしている。そして、麓氏は、『資本論』第一巻第一篇第一章第三節において展開されている価値形態論では「価値の

表現形態の論理的・歴史的発展をとおして、貨幣がいかにして (wie) 必然的に形成されるかということ、いいかえれば、特殊の一商品である金はいかにして一般の等価物に、したがって貨幣になるかということが、論ぜられている」、また第二章において展開されている交換過程論では「貨幣は何によって (wodurch) 必然的に発生するのかということ、いいかえれば貨幣は何によって必要とされ (どういう必要から) 形成されるのかということが論じられている」(同書、三八ページ)といずれも久留間鯨造氏の見解にしたがってのべられている。『資本論』第一巻第一章第四節にかんする叙述はみあたらないが、Ⅳ節の表題ないしききに引用した文章によってもわかるように、そこでは「なぜに」が論ぜられているという見解をもたれていることはあきらかである。したがって、麓氏は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という貨幣生成の必然性の問題における三つの課題は『資本論』のいずれの箇所において考察され、解明されているか、というように論をたててかかれてはいないが、三宅氏の『貨幣信用論研究』においてのべられている見解、久留間氏の見解と同じく、「いかにして商品が貨幣であるか」は『資本論』第一巻第一篇第一章第三節において、「なぜに商品が貨幣であるか」は第一章第四節において、「なにによって商品が貨幣であるか」は第二章において、それぞれ解明されている、と考えられていることになる。麓氏は、このような見解にもとづいて貨幣生成の必然性の問題をとりあつかわれているわけである。

ところで、麓氏は、さきに引用したⅤ節の文章につづいてつぎのようにのべられている。

「ところで、Ⅲ節もこのⅤ節も、ともに貨幣発生 of 必然性を問題にしているとすれば、両者の関係はどうなっているのか？それは、前者においては、貨幣発生 of 必然性が、抽象的・思维的・理論的に問題にされているのにたいして、後者においては、同じことを現実的に取り扱ってみようというのである」(同書、三六ページ)。

ここでは、Ⅲ節においても、Ⅴ節においてもいずれも貨幣発生 of 必然性を問題にしているのだが、相異った側面からこの問題を考察し、とりあつかっているのだ、ということをとのべられている。Ⅲ節およびⅤ節についてはこのようにのべられているのであるが、Ⅲ節とⅤ節とのあいだにあるⅣ節はどうなのであるうか。Ⅳ節においては、貨幣発生 of 必然性の問題をとりあつかっているのではないのであるうか。Ⅳ節は「貨幣はなぜ必然的に発生するのか」が表題となっており、このような課題をあきらかにしようとしてもうけられているはずである。このような課題は、貨幣発生 of 必然性の問題における課題の一つではないのであるうか。そうでは決していない。麓氏はこのような課題も貨幣発生 of 必然性の問題における一つの課題であると考えておられるからこそⅣ節でとりあつかっているわけである。それでは、麓氏は、どうしてⅢ節とⅤ節のみをあげて貨幣発生 of 必然性の問題をとりあつかっているというようにかかれているのであろうか。まえにのべたように、麓氏はⅢ節において「価値形態の発展」を考察し、「いかにして商品が貨幣であるか」をあきらかにしようとして、Ⅴ節においては「交換過程」を考察し、「なにによって商品が貨幣であるか」をあきらかにしようとして、二つの相異なる側面から貨幣の発生をあきらかにしようとしてるのであるが、Ⅳ節においては「なぜに商品が貨幣であるか」を考察し、なぜに貨幣が必然的に発生するのか、発生しなければならぬのか、という貨幣発生 of 必然性の根拠をあきらかにしようとしてる。Ⅲ節とⅤ節においては、貨幣の発生 of 必然性そのものを理論的に、現実的にとりあつかうのだが、Ⅳ節においては、この貨幣の発生 of 必然性の根拠を、その「なぜに」をとりあつかう、だからⅢ節とⅤ節との関係だけについてのべ、Ⅳ節とⅢ節、Ⅴ節との関係についてはふれられていない、というように考えられる。Ⅳ節をとばして、Ⅲ節とⅤ節との関係についてのみのべられるということが生じてきたのは、貨幣生成 of 必然性の問題における三つの課題の考察を「いかにして」、「なぜに」、「なにに

よって」という順序でおこなわれているからである。麓氏は、「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という三つの課題の相互の関係を、Ⅲ節とⅤ節との関係ばかりでなく、Ⅳ節とⅢ節、Ⅴ節との関係についても考察されればよかったのではないかと思われる。

以上、手もとにある二、三の論文、書物を通して諸論者は、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という課題をどのように理解し、どのようにもちいているか、そして、これらの三つの課題が『資本論』のいずれの箇所において説明されているか、ということについて、さらに貨幣生成の必然性の問題をどのようにとりあつかっているか、ということなどについてみてきた。「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という課題は、貨幣の本質の問題における課題として理解されている論者もいるが、大部分の論者は貨幣生成の必然性の問題における課題として理解されている。そして「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの課題が『資本論』のいずれの箇所において説明されていると考えられるかということについては、いずれも『資本論』第一巻第一章第三節「価値形態または交換価値」のところで説明されているとする見解、第一章第三節「価値形態または交換価値」および第二章「交換過程」の二箇所において説明されているとする見解、第一章第三節「価値形態または交換価値」、第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」、そして第二章「交換過程」のところで説明されているとする見解の四つの見解がみられた。さいごの見解においては、「いかにして商品が貨幣であるか」という課題は第一章第三節「価値形態または交換価値」のところで説明され、「なぜに商品が貨幣であるか」という課題は第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」のところで説明され、「なにによって商品が貨幣である

か」という課題は第二章「交換過程」のところでいて説明されているとしている。かくして、貨幣生成の必然性の問題における三つの課題は、マルクスがこの三つの課題を指摘した順に、すなわち「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順に、それらは『資本論』第一巻第一章第三節、第四節、第二章という『資本論』第一巻第一篇の構成の順序にしたがって説明されているとすることになる。

ところで、貨幣生成の必然性の問題における「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの課題が『資本論』のいずれの箇所においてそれぞれ説明されているかということをまちがいなく、正しくいいあてたとしても、それで貨幣生成の必然性の問題が正しく理解されるというわけではけつしてない。しかし、これらの三つの課題が考察され、説明されている『資本論』におけるその箇所もわからないのでは、あるいはその箇所をとりまちがえてしまうならば、とうてい貨幣生成の必然性の問題を正しく理解することはできず、その理解たるや、不完全な、歪曲されたものとならざるをえないであろう。貨幣生成の必然性の問題における三つの課題が考察され、説明されている『資本論』の箇所を正確にとらえたならば、つぎになさるべきことは、それぞれの箇所の理論的内容を正しく理解し、把握することである。正しい箇所をとらえたとしてもその箇所の理論的内容を不完全にまちがって理解したり、曲解してしまえば、これまた正しい解答はとうてい生まれてこないであろう。貨幣生成の必然性の問題における三つの課題が考察され、説明されている箇所を『資本論』のなかでいいあてることとその箇所の理論的内容の理解とはまったく別のことである。

三

第二節においては、諸論者の見解を考察してきたが、わたくしは、さいしょにのべたように、「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題は、貨幣生成の必然性の問題における課題であると理解している。しかし、これらの課題は『資本論』のいずれの箇所においてそれぞれ考察され、説明されているかということについては、多少こととなった見解をもっている。さきにあげた四つの見解のなかでもっともすぐれている見解はさいごの見解であるが、この見解においては、「なぜに商品が貨幣であるか」という課題は『資本論』第一巻第一篇第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」のところで考察され、説明されているとしている。たしかに、この第四節において「なぜに商品が貨幣であるか」という課題が説明されているが、しかし、第四節だけを読んでみても理解することはできない。なぜなら、第四節における論述を理解するためには、第一節「商品の二要因——使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」および第二節「商品で表示される労働の二重性格」の論述の理解がなければならぬからである。さきにあげた四つの見解のさいごの見解をもたれる論者も、もちろん第一節、第二節を考慮していないわけではなく、当然、前提されるべきものとされていると思うのであるが、「なぜに商品が貨幣であるか」という課題は第四節において説明されているとすると、第四節だけを読めばこの課題が説明されうる——読んでみれば第四節だけでは理解しえないということがわかるが——と単純にとらえられてしまうおそれがある。そこで、わたくしは、「いかにして商品が貨幣であるか」は第一章の第三節において、「なぜに商品が貨幣であるか」は第一章の第一節、第二節、第四節において、「なにによって商品が貨幣であるか」は第二章において説明されているというように考

えている。もちろん、「いかにして商品が貨幣であるか」は第一章第三節において説明されているとしても、この第三節における論述を理解するためには、第一節および第二節における論述の理解が必要である。わたくしがこの第一節、第二節を第四節とともに「なぜに商品が貨幣であるか」という課題が説明されている箇所のないのは、つぎのべる「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という三つの課題についての考察の順序と関係があるからである。したがって、これからのべることを理解していただければ、「いかにして商品が貨幣であるか」という課題は、第一章第三節において説明されているとしてならさしつかえない。

ところで、貨幣生成の必然性の問題における「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの課題は、「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序において考察をすすめていかなければならないのであろうか。麓氏は、この三つの課題を「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序で考察し、貨幣生成の必然性の問題を取りあつかっているのであるが、どうも説得的であるとは思われない。それは、「なぜに商品が貨幣であるか」という課題を「いかにして商品が貨幣であるか」という課題のつぎにとりあつかい、さいごに「なにによって商品が貨幣であるか」という課題を取りあつかっているからである。麓氏は、『貨幣論』の第一章において貨幣生成の必然性の問題を取りあつかい、Ⅲ節「価値形態の発展」で「いかにして商品が貨幣であるか」という課題を考察され、Ⅳ節「貨幣はなぜ必然的に発生するのか」で「なぜに商品が貨幣であるか」を考察され、Ⅴ節「貨幣発生の現実的必然性」において「なにによって商品が貨幣であるか」という課題を考察されており、貨幣生成の必然性の問題を「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序であきらかにしようとされているのであるが、それにもかかわらず、まさに麓氏の見解をみたところでものべたように、「Ⅲ

節もこのV節も、ともに貨幣発生 of 必然性を問題にしているとすれば、両者の関係はどうなっているのか？」というようにかれ、IV節が地についたものとしてとりあつかわれていない。これは、「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序で考察をすすめられたことの一つの難点のあらわれであるというように思われる。

久留間鯨造氏は、「なお、ここについて一言しておきたいと思うことは、これらの三つの問題「いかにして商品が貨幣であるか」、「なぜに商品が貨幣であるか」、「なにによって商品が貨幣であるか」という三つの問題」は、マルクスが論理のシェーマといったふうなものによって、いたずらにでっちあげたものではなくて、そのいずれを解決しなくても貨幣に関する認識は十分でありえないところの、そして現に、それらを解決しえなかったために従来の経済学がさまざまな誤謬におちいったところの、現実的な問題だということである」（久留間鯨造『価値形態論と交換過程論』、四一ページ、「」内は引用者）とのべている。

三宅義夫氏は、さきに氏の見解をみたとき『資本論辞典』の「労働貨幣」のところから引用した文章によってもあきらかなように、「なぜに」という課題からはじめられている。また『資本論講座』においても「貨幣の形成」をつぎのような文章からはじめられている。

「諸商品の価値の大きさはその商品を生産するのに社会的に必要な労働時間によって決定されるが、この商品に含まれている社会的必要労働時間は何時間である、というように、直接にいい表わすことはできない。もし商品の価値が何労働時間というように表示することができらば、『商品』の交換はその券面に一労働時間とか五労働時間と印刷した紙片を介して行なわれ、この紙片が『貨幣』として流通することになるであろう。なぜこのように商品の価値が直接に労働時間で表示できないか、なぜ他の商品——けっきょくは貨幣——で表示されざるをえないかというと、

商品生産の基礎上では労働は個々の私的労働として営まれているので、直接に社会的労働として表示されえないからである。したがって貨幣を廃止するには商品生産を廃止して、労働が直接に社会的労働として営まれるのでなくてはならない。

ここではマルクスが価値形態論と交換過程論において、どのような筋道で貨幣の形成を説いているかを見ておこう（遊部久蔵、三宅義夫編『資本論講座1』、青木書店、一九六三年一月、第二篇「貨幣論」、三宅義夫稿「I原典解説」、二二六―二七ページ）。

みられるように、三宅氏は『資本論講座1』における「原典解説」においても「貨幣の形成」をまず「なぜに」という課題からはじめられている。

マルクスは、たしかに「いかにして、なぜに、なにによって、商品が貨幣であるか」という三つの課題を「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序で『資本論』第一巻第一篇第一章および第二章において考察し、そして解明した。どうしてこの三つの課題がこういう順序で考察されたのかというと、それは、第一章および第二章においては商品が主格であり、商品したがって商品交換が研究の対象であったからであると思われる。しかし、これらの三つの課題は、久留間氏がのべられているように論理のシェーマとしてつくられたものではない。いま、貨幣生成の必然性の問題の側面から「商品が貨幣である」ということを考察するばあいには、「いかにして」、「なぜに」、「なにによって」という順序によってではなく、まず「なぜに商品が貨幣であるか」という課題から考察し、貨幣生成の必然性の根拠をあきらかにすることからはじめ、そして、それでは「いかにして商品が貨幣であるか」をつぎに考察し、さいごに「なにによって商品が貨幣であるか」という課題を考察していくということが許されるのではないであろう。

か。この順序で貨幣生成の必然性の問題における三つの課題を考察していくならば、「なぜに商品が貨幣であるか」という貨幣生成の必然性の根拠があきらかにされる課題が、「いかにして」と「なにによって」とのあいだにはさまって麓氏のさきに引用した文章におけるような不都合は生じないであろう。総じて、「なぜに」があきらかにされなければ、「いかにして」、「なにによって」という問題は生じてこないはずである。三宅氏の考えられていることはわからないが、とにかく、まえにみたように、まず「なぜに」という課題からはじめられ、そして「いかにして」、「なにによって」と論をすめられていることは事実である。

わたくしは、別のところで、「なぜに」、「いかにして」、「なにによって」という順序で貨幣生成の必然性の問題を取りあつかうのが正しい方法ではないかと考え、そしてそれらを『資本論』のいずれの箇所にもとづいて論述したらよいかということについてつぎのようにのべた。「私は、貨幣生成の必然性の問題は、まず第一章第一・二・四節『資本論』第一巻第一編第一章第一節、第二節、第四節』にもとづいて『なぜに商品が貨幣となるか、ならなければならぬか』を考察し、ついで第三節『第一章第三節』にもとづいて『いかにして』を、そして第二章にもとづいて『何によって』を考察するのが、取扱い方として正しい方法ではないかと考えているのである」（拙稿「貨幣論」、杉本俊朗編『マルクス経済学研究入門』、有斐閣双書、昭和四〇年六月、五五ページ、「」内は追記）。

そこで、稿をあらためて、この順序で、すなわち、まず「なぜに商品が貨幣であるか」という課題を『資本論』第一巻第一篇第一章第一節、第二節、第四節にもとづいて、つぎに「いかにして商品が貨幣であるか」という課題を第一章第三節にもとづいて、そしてさいごに「なにによって商品が貨幣であるか」という課題を第二章にもとづいて、これら三つの側面から貨幣生成の必然性の問題を考察していこうと思う。